

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

私達の日常生活は、すべてが好都合にはこぶというものではなく、喜怒哀楽、さまざまな感情の中で、失敗したり、苦難にぶつかったりして、七ころび八起きの毎日といつても、かならずしも言いすぎではないであろう。

そんな毎日の中で、失敗や不安、また不満に対して、私たちはどのようなとりくみ方をしたらよいのだろうか。そのとりくみ方によって、私たちの生活がプラスに向くかマイナスに向くか、大きなわかれめとなってくる。これらについては深く見詰め、はっきりとした信念を固めておきたい。

さてここでは特に失敗の面をとりあげてみよう。私たちにはしばしば、自分の犯した失敗と正面から向き合わなければならなくなる時がある。

「こんな失敗をしてしまったよ」と笑ってすませようなささいな失敗ならば、たいしたことはないだろうし、また「すみませんでした」とその場でおわってしまうことのできる軽いものもある。しかし大きな失敗になると、とてもそれだけではすまされなくなる。自分で弁償しなければならなかったり、自分だけの問題ではすまされず、他の人に迷惑を及ぼすことになってしまったりもする。そしてまた、会社全体にかな



「失敗」こそわが師

丸山竹秋

りマイナスを負わせたど、ひけめを感じなくはならない場合も生ずるのである。

どんな失敗にせよ他を責め、それだけの方をつけようとするのではプラスにならない。自分の失敗については、それを自分の問題としてとらえ、そこには必ず自分としての原因があることを見きわめることが先決である。そして、原因の追究が肝心なのだ。そうすると「次はこの失敗をくり返すまい」また「このような問題がきたら、こんなふうには注意してやればいいんだな」と反省でき、非常により教訓が得られる。

こう言ってしまうと「そんなことはわかりきったことだ」とか「百も承知だ」という人もあろう。しかしわかりきったはずのことを、案外忘れ去ってしまったはずのことはなからうか。「わかっている。わかってる」という人に限って実際に失敗に直面すると「しまった、しくじった」と頭をかかえこむだけで、原因の追究をいかげんにして、ごまかしていたりすることが多いのではなからうか。承知していると言っているのと、実際の失敗をプラスに向きかえているのとは、根本的に違うのである。

失敗したとき、どのような原因でこの失敗に到ったかを考え、ふり返ってみると、必ず教訓として返ってくるものがある。この教訓こそ生きた師にほかならない。

失敗したあとの生き方や態度こそ、重要なのだ。そこから、身にしみた教訓をたしかにつかみとることが、そのポイントである。

『いかに乗りきるか』より